

## ■マーラー／交響曲 第1番 二長調「巨人」

川瀬氏が「今の僕とほぼ同じ歳に書いた交響曲は奇抜で不完全で…だから大好きなのです！」と評しているマーラー（1860-1911）の交響曲第1番が、今日のメインである。サロネンの作品より、ほんの少し大きな楽器編成で、しかも聴き手の予想を裏切る、いや予想そのものを不可能にするような音楽の構成を特徴としている。最初の交響曲から、この型破りはすごい。そして全曲にみられるロマンティックな楽想や力強い奔流には、青年期らしい瑞々しさも備わっている。

現在の出版譜は、1888年の第1稿に比べると、オーケストラの編成がひとまわり大きい。しかし、これは音量で威圧することを目的としたのではなく、折り重なったモチーフの性格を描きわけける精緻な音響設計を実現するため、どうしてもこれだけの楽器が必要になったのである。卓越した「音色による演出」こそ、マーラーの面目躍如たるゆえんで、「これで全体にすべてがスマートに、より透明になった」と、マーラーはR.シュトラウスに自負している。

当初の5楽章から1楽章が削られ、1899年の第3稿から4楽章構成となった。全体を標題音楽的に解説するなら、第1楽章の素材が《さすらう若人の歌》第2曲「朝の野辺を歩けば」に基づいていることや、第3楽章の中間部に同じ歌曲集の「2つの青い眼が」の後半部分が用いられていることから、「失恋」が当初のテーマだったことがわかる。

第1楽章「ゆるやかに、重々しく」は、類例のないユニークな序奏をもつ。「自然の音のように」と記され、弱音でずっとイ音が持続しているなか、カッコウの鳴き声が聴こえてきて、フルートからバス・クラリネットまで様々な木管楽器が音色と音域をかえながら奏でられていく。霧がかかったような音色の効果は、現実の自然ではなくて心象風景に近い印象をもたらしている。主部は前述のとおり、歌曲「朝の野辺を歩けば」を主題とする破格のソナタ形式。従来の展開部にあたるところで、序奏の雰囲気がよく見える。一瞬の静寂のあと、金管の明るく輝かしいファンファーレが段階的にクライマックスへ導いていく。

優美なフルツをトリオとする第2楽章「力強く動いて」は、レントラーのメロディに初期の歌曲集《若き日の歌》の「ハンスとグレーテ」（草原の5月の踊り）のモチーフを引用している。ミュートしたホルンや弓で弦をたたく特殊奏法が使われ、はじけるようなエネルギーに満ちた民衆の舞曲を想起させる。マーラーが小さい頃から何百という民謡を覚えていたというエピソードを思い出す。

第3楽章「緩慢になることなく、荘重に威厳をもって」は戯画的な性格があたえられた葬送行進曲。ティンパニの連打に続いて、弱音器付きのコントラバスとチェロのソロ、ファゴットによる流行歌「フレール・ジャック」のメロディが悲愴な調子で奏でられているところへ、突如、楽隊風の音楽が挿入される。このグロテスクな対比とは一変して、中間部は安らかなメロディが奏でられるが、これが《さすらう若者の歌》の「2つの青い眼が」の引用である。

葬送の行列が遠のいていったのち、シンバルの一撃から第4楽章「嵐のような動きをもって」。大胆な転調を用いたフィナーレで、猛り狂う行進曲風の主題が静まると、ヴァイオリンによる優美なメロディが歌われ、やがて第1楽章序奏の神秘的な森の幻影がよく見え、鮮やかなドラマが展開される。スコアにはクライマックスで、ホルン7人が立って吹く指示があり、熱狂の頂点で終結する。

白石美雪

楽器編成：フルート4（ピッコロ持ち替え2）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持ち替え1）、クラリネット4（E♭クラリネット持ち替え1、バス・クラリネット持ち替え1）、ファゴット3（コントラファゴット持ち替え1）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、シンバル、バス・ドラム、トライアングル、銅鑼、ハープ、弦5部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。